

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価										様式1（特別支援学校）		
学校名		佐賀県立大和特別支援学校										
前年度 評価結果の概要		・評価項目12中A評価が6項目、B評価が6項目、C評価が0項目だった。課題を整理して令和6年度の改善策を検討していく必要がある。 ・「自立活動の指導目標、指導内容、指導場面の明確にして授業を行った」「学年やグループで児童生徒の実態や授業の手立てについて話し合い、授業実践に役立てた」「卒業後の生活に必要な力をつけるための教育に努めていた」「支援部によりへの教材教具等の資料の提供を通して、地域支援の一端を担った」の4項目が2点台のB評価となり、改善を図る必要がある。特に、自立活動の指導については、児童生徒個々の目標を達成できるように、令和6年度より設置した時間の指導の場面で確実に自立活動の指導を実施していく。また、職員全員が主体的に専門性を高めることができるように「一人一研究」に取り組む。 ・「業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減」については、毎週水曜日を実施している定時退勤の実施だけでなく、年次有給休暇取得の向上（14日以上）を目指して取り組んでいく。 ・「効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター機能の充実」については、支援部によりを年2回発行し地域の学校へ向けて指導・支援に役立つ情報提供を行った。地域の学校から示された要望をもとに情報提供の内容を改善していく。										
学校教育目標		「たくましく自立し、積極的に社会に参加する人間の育成」 ・子ども一人一人のニーズに応じた最適な対応に努めることにより、子どもが自分の力を発揮しながら自立的・主体的に取り組む姿を実現し、将来の自立的・主体的な地域生活へつなげていく。										
本年度の重点目標		① 自立活動の指導の充実を図る。 ② 職員の特別支援教育に関する専門性の向上を目指す。 ③ 職員の意識改革や業務改善等を行い、働き方改革を推進する。										
重点取組内容・成果指標										5 最終評価		
共通評価項目												
重点取組												
評価項目		取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組		中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
						達成度 (評価)	進捗状況と見直し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○児童生徒一人一人に応じた自立活動の指導の充実	○（保護者成果指標）「子どもの自立活動の目標や活動状況について理解している」と回答した保護者の平均が82%以上 ○（職員成果指標）「自立活動の指導目標、指導内容を明確にして、時間の指導や教育活動全体の指導と関連づけて指導を行った」と回答した教職員の平均が80%以上	・保護者懇談会で、個別の指導計画を提示し活動状況を確認に伝える。 ・自立活動の自主研修を3回実施する。 ・学年主任や担任と連携し、自立活動の時間の指導を計画的に実施する。 ・自立活動の実践例を紹介する。		B	・アンケート結果「子どもの自立活動の取り組みについて理解している」と回答した保護者86.9%「個別の指導計画に示した自立活動の目標、指導内容、指導場面に沿って自立活動の指導を行った」と回答した職員74.5% 職員が未達成 ・個別の指導計画に指導内容、指導場面の明確に示し、自立活動の時間の指導に取り組んでいる。各担任がそれぞれ実施しているので、今後は各学年や学部で情報交換しながら進めていく。(小学部) ・各学年、各学級で6区分全ての実態把握をし、後期は個別にも指導を進めていく。(中学部) ・自立活動の集めた指導案やデータ等をフォルダに入れたり、教具や参考図書を置く場所を職員室の一角につくったりし、みんなで共有、活用をしていく。(高等部) ・自立活動の評価は、指導内容について子どもたちがどこまでできたかを具体的に記入し、保護者へ伝えていく。	B	・個別の指導計画に基づき、個別で指導を行ったり、内容によっては学級ごとに小集団での指導を行ったりした。指導内容や指導方法についての学部内で共有し、来年度の指導に活かしたい。(小学部) ・主に学級や少人数に分かれて、指導を行った。今年度は手探り状態で行ったが、指導の構築ができた分を次年度に活かし、一人一人に応じた指導に活かしていきたい。(中学部) ・まず各学級で6項目すべてに関して実態把握をし、そして学級で、グループで、個別で指導を行った。それぞれの学年の中で共有したデータや教材、指導方法を他学年とも共有し、来年度に活かしたい。(高等部) ・今年度は自立活動の時間の指導や一人一研究をとおして、自立活動の指導内容が深まった。今後は保護者にも目標や評価が分かりやすく伝わるように努力していきたい。	B	・授業に取り組む前の自立活動は、大切だと感じる。		
	○職員の特別支援教育に関する専門性の向上	○（保護者成果指標）「学校生活や授業を通して、子どもが生き生きと活動し成長を感じられている」と回答した保護者の平均が80%以上 ○（職員成果指標）「特別支援教育に関する専門性の向上を目指して、一人一研究に取り組んだ」と回答した教職員の平均が80%以上	・保護者懇談、授業参観、連絡帳などを通して教育活動について専門的見地からの提案を行う。 ・年間を通して教職員が一人一テーマで研究を行う。 ・1月に全体でポスターによる研究発表を行う。 ・特別支援教育の専門性に関する研修を2回実施する。		B	・アンケート結果「学校生活や授業を通して、子どもが生き生きと活動し成長が感じられる」と回答した保護者87.9%「特別支援教育に関する専門性の向上を目指して、一人一研究に取り組んだ」と回答した職員68.0% 職員が未達成 ・保護者懇談、授業参観、連絡帳などのやり取りを通して、日々の教育活動についての理解を図り、専門的見地に立った提案や支援の共有を行った。(小学部)(中学部)(高等部) ・毎月の教育研究の日に、特別支援教育に関する専門性の向上を目指して、全教職員が個々に研究テーマを設定し、研究内容や方法を検討し取り組んでいる。また、10月中には各学年毎に研究テーマについてのグループワークを行い、情報交換を図る。 ・1月のポスター発表では、個々の発表に加え、外部講師を招聘して特別支援教育の専門性に関する研修会を行う。	B	・中間評価と比べ、保護者はほぼ同じ、職員は68.0% 未達成から75.3%と達成度が上がった。全職員一人ひとりが研究テーマを設け、毎月の教育研究の日に特別支援教育専門性の向上を目指して、研究に取り組んだ。また、各学部や学年、グループで研究の進捗状況や課題についての話し合いの場をそれぞれ設けることができた。 ・1月の校内研究会では、一人一枚のポスターでの研究発表と共に、校内外の教職員や保護者も参加の上で意見交換を行い研究を深めた。また、外部二名の講師より研修を受け、議題「これからの特別支援教育を担う教師の専門性の深化」「人が育つ組織 満足感・安心感のある組織づくり」について学んだ。 ・保護者とは5月1月の懇談、授業参観、支援会議、連絡帳のやり取り、登下校時の直接対話を通して、支援の共有を図った。 ・次年度の研究課題に向けて、アンケートを集約し、検討、協議の上、テーマや方法を決めていきたい。	B	・一人一研究が可視化されていて大変良かったです。 ・本人が何故どうしての疑問が残る校内ルールについての説明がなく、ストレスをかかえている。 ・家庭で取り組めることがあれば、フィードバックして欲しい。共通理解(目標など)があれば、一緒に取り組める。 ・類似したテーマが多く共同研究も検討していいのではないかと思います。		
	○進路指導とキャリア教育の充実	○（保護者成果指標）児童生徒にとって、「卒業後の生活に必要な力をつけるための教育が行われている」と回答した保護者の平均が80.0%以上 ○（職員成果指標）「卒業後の生活に必要な力をつけるための教育に努めている」と回答した教職員の平均が75.0%以上	・学部別に保護者への進路講話や進路だよりなどの情報提供のための資料の充実を図る。 ・キャリアパスポートの活用状況を確認し、担当職員でフィードバックする場を設ける。		A	・アンケート結果「卒業後の生活に必要な力をつけるための教育が行われている」と回答した保護者86.2%「児童生徒及び保護者のニーズに応じた進路情報を提供し、卒業後の生活に必要な力をつけるための教育に努めた」と回答した職員77.6% 保護者、職員ともに達成 ・時期ごとにキャリアパスポートを活用した授業を行った。(小学部)(中学部)(高等部) ・小学部、中学部に進路講話を実施して、進路情報の提供を行った。今後高等部でも進路講話を実施し、卒業後の生活に必要な力をつけるための教育に努める。	A	・「卒業後の生活に必要な力をつけるための教育が行われている」と回答した保護者87.1%「児童生徒及び保護者のニーズに応じた進路情報を提供し、卒業後の生活に必要な力をつけるための教育に努めた」と回答した職員77.1% 保護者、職員ともに達成 ・時期ごとにキャリアパスポートを活用した授業を行った。(小学部)(中学部)(高等部) ・小学部、中学部、高等部(学年別)に進路講話を実施して、進路情報の提供を行った。 ・引き続き授業や進路講話、進路だよりを通じて、卒業後の生活に必要な力をつけるための教育について共通理解を深めるようにする。	A	・卒業後に必要な学習スキルが身に付いていない。		
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	(学校) ●（保護者成果指標）「お子様の思いやりや豊かな心を育む教育活動が実施されている」と回答した保護者の平均が80%以上 ●（職員成果指標）「互いに助けあったり協力したりする学習を行った」と回答した教職員の平均が80%以上(寄宿舎) ●（保護者成果指標）「子どもの、相手を思いやる心や、協力する気持ちを育てる支援がされている」と回答した保護者の平均が80%以上 ●（職員成果指標）「思いやり、心や協力しようという気持ちを育てる支援を行った」と回答した職員の平均が80%以上	(学校) ・特別の教科道徳や特別活動、各教科等の授業で思いやりや豊かな心を育む教育活動の充実を図る。 ・交流及び共同学習や学校行事等で、他者と関わる場面を設定したり、多様な体験活動を実施したりする。(寄宿舎) ・異年齢での集団生活や季節行事、自治活動を通して相互理解を図り、思いやりの心を育てる。 ・日々の生活を送る中で、自分自身や周りの仲間を大切にし、主体的に楽しく生活ができるようにする。		B	・アンケート結果「授業や学校行事等を通して、お子様の思いやりや豊かな心を育む教育活動が実施されている」と回答した保護者86.8%「道徳や特別活動、交流及び共同学習での他者と関わる場面や多様な体験活動を通して、互いに助けあったり協力したりする学習を行った」と回答した職員78.8%「日常生活や自治活動、季節行事などを通して、お子様の主体的に生活できる力や思いやる心、協力する気持ちを育てる支援がされている」と回答した寄宿舎(保護者)91.3% 職員が未達成 ・集団学習のなかで、各学年の実態に合わせて、助け合い、協力し合う場面を設定するようにしている。交流及び共同学習では、交流校の児童と関わる場面を設定し実施している。(小学部) ・特別活動で、生命を尊重する、健康な心と体を大切に保持する授業を行っている。(中学部) ・教育活動全体で他者を思いやる言葉や行動について指導している。(高等部) ・交流及び共同学習として、小学部では居住地校交流と川上小学校との交流を行った。事後の保護者アンケートや本校及び相手校の児童の感想などからも、「交流できてよかった」「楽しかった」などの建設的な意見が多くみられた。中学部では、松梅中学校との交流学習を行い、作業学習の体験を通して他者理解につながった。高等部では、国民スポーツ大会との兼ね合いで高志館高校とは間接交流になったが、壁新聞を通して有意義な交流になった。他者と関わる場面設定や多様な体験活動は教育的効果が大きいので、今後も継続しながら実施していく。(学習部) ・部屋活動や全体活動を通して、協力する気持ちや主体的に活動できる力を育てる指導・支援を行っている。ミーティングや部屋会を通して、思いやり、心やマナーなどを身に付ける支援を行っている。(寄宿舎)	B	・「思いやりや豊かな心を育む教育活動」「他者と関わる場面や多様な体験活動を通して、互いに助けあったり協力したりする学習」「主体的に生活できる力や思いやる心、協力する気持ちを育てる支援」として、小学部では、日々の集団学習のなかで、各学年の子どもたちの実態に合わせて、助け合い、協力し合う場面を設定することができた。中学部では、特別活動で、生命を尊重する、健康な心と体を大切に保持する授業を行った。高等部では、教育活動全体を通して、他者を思いやる言葉や行動について日々指導することができた。また、交流及び共同学習では、小学部では、交流校の児童と関わる場面設定を目的に居住地校交流と川上小学校との交流を実施することができた。事後の保護者アンケートや本校及び相手校の児童の感想などからも、「交流できてよかった」「楽しかった」などの建設的な意見が多くみられた。中学部では、松梅中学校との交流学習を行い、作業学習の体験を通して他者理解につながった。高等部では、国民スポーツ大会との兼ね合いで高志館高校とは間接交流になったが、壁新聞を通して有意義な交流を実施することができた。学習部として、他者と関わる場面設定や多様な体験活動は教育的効果が大きいので、今後も交流及び共同学習は継続しながら計画、実施していきたい。 ・寄宿舎では「日常生活の指導・支援をする中で、協力しようとする気持ちや、他者を思いやる気持ちを育てる支援」を行った。毎月行う部屋会では、舎生一人一人の意見を聞くとともに、お互いの意見を尊重する支援を行った。行事を通して、互いに協力する気持ちを育てる支援方法を探り実践した。集団生活だからこそその協力する心、思いやり、心を育てる指導支援を行っていきたい。	B	・以前に比べて我が子の他者への気持ちや育っている様子が見られております。学校間交流で交流した川上小のお子さんと新しく通う放課後児童デイサービスで再会し、お互い「おっっ！」と気付いたと報告がありました。交流が次につながっており嬉しく思います。 ・同年代の普通学級との交流が途絶えるのが残念。支援学校全ての課題ですね。		
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	●学校は生徒間トラブルについて、早めに保護者に情報提供を行い、迅速な解決手段を取っていると回答した保護者の平均が75%以上 ●人権を大切にする言葉かけや人権の授業に取り組んだ」と回答した教職員平均が77.5%以上	・生徒間トラブルについては、学年主任、学部主事、生徒指導主事、管理職に報告し、具体的な解決手段や手立てを確認先に保護者に伝える。 ・年12回以上、人権に関する授業実践やいじめ、人権研修を計画し、実施する。		A	・アンケート結果「生徒間のトラブルについて、内容や今後の解決策など、保護者に情報提供が十分に行われている」と回答した保護者86.9%「人権に関する授業実践やいじめ、人権に関する研修に確実に参加し、学んだことを生徒対応に還元することができた」と回答した職員77.6% 保護者、職員ともに達成 ・生徒間トラブルについては、職員は保護者と情報を共有し、家庭と連携を取りながら問題解決に向けた手立てを取っている。また、年2回のアンケートの回収率(80%以上)も高く、学校の対応に対する要望も少ない。今後も引き続きいじめ職員研修や学部会を通して啓発するとともに、職員(学部)間での情報共有を積極的に図っていく。 ・人権を大切にする言葉掛けや授業の実施については、人権研修の実施だけでなく、人権に関する各種研修会の参加の呼びかけを幅広く行い、多くの職員の参加を促す。	A	・中間、最終評価ともに「A」で目標は達成しているが、前回調査から保護者、職員ともわずかに数値が下がる結果となった。 いじめに関しては、学校で起きたトラブルの保護者への情報共有やアンケートの回収、いじめや問題行動等への迅速な対応など、本校職員の指導、サポートに保護者も満足している様子がうかがえる。 一方、人権に関する授業実践や研修への参加は、不十分と考えている職員が少なくない。特に年に一度の本校の研修しか受けていない職員は、生徒への還元が十分ではないと感じていることが考えられる。今後は、県主催の人権に関する研修へ多くの職員の参加を促すとともに、特別支援学校で実践できる人権に関する授業例の紹介も積極的に行っていく必要があると考える。	A	・いじめ、不快を言葉にできる生徒に関しては、有効な対応ができていると思う。 ・一番気になる不安な問題です。〇を目指していただきたいです。		
●心	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生は子どものよいところを認めてくれていると思う」と回答した保護者95%以上 ●「将来の夢や目標をもてるように授業を工夫した」と回答した教職員の平均が80%以上	・児童生徒の自己肯定感が高まるように、できていることを伝えたり、仲間同士で認め合ったりする場面を設定する。 ・児童生徒が「自分は人のために役に立っている」「現在の自分に満足している」「自分はできている」「自分は前向きに挑戦している」と感じることができる授業作りをする。		A	・アンケート結果「本校の職員は、お子様の成長しているところや頑張っていることを褒めている」と回答した保護者92.3%「子どものよいところを褒めたり認めたりでできるような状況を作り、子どもが主体的に活動できるように授業を工夫した」と回答した職員85.8% 保護者、職員ともに達成 ・学期や就業体験の終わりに、自分が頑張ったことを振り返り、自覚し、自信を付け、次のステップへ向かう授業を行っている。(中学部) ・日々、小さなことでも褒め、そのことが良いことなのだ、自信をもって継続していこう、と生徒が思う言葉掛けを行っている。(高等部)	A	・生活面や学習面での課題をスモールステップで指導し、できたことを褒めることにより、意欲的に活動する児童の姿が見られた。その様子を日々の連絡帳で、保護者に伝え、ともに成長を喜び、家庭でも褒められることにより、児童の自信につながったと思われる。(小学部) ・前期の初めに学習面と生活面の目標を挙げ、学期末に反省を行い、後期の目標を作成した。キャリアパスポートの活用も行った。年2回の作業学習週間では、自分の活動に満足する生徒が見られた。(中学部) ・学期末の振り返りの学習や就業体験事後学習などで、自分ができるようになったことや成長したことが自覚できる学習を行った。生徒のよい言動に対して気付いたり、職員間で情報を共有したりして小さなことでも褒める言葉掛けをしてきた。生徒の自信につながったと感じる。(高等部)	A	・「褒める」もできているが、減点方式のマイナス評価の声掛けが気になるときがある。 ・子供の小さな成長に気付いてくれて一緒に喜んでもらえるのが、親としてとても嬉しいです。 ・障害者を支援するときの難しさを日々感じている。例えば、適切に「褒める」と「認める」を使い分けること……。子どもたちの自己肯定感を高めるためには必要だと感じる。また、不安の訴えにどこまで寄り添うのか、背中を押す場面があるのではないかと、保護者を含めて勉強をしていく必要がある。		

